



「 il bello dorso 」

社会教育スタッフ 社会教育主事兼企画幹 品川 智成

「キーンコーンカーンコーン。朝のあいさつをしましょう。」

「おはようございます。先生のお話を聞きましょう。」

「はい、今日の予定は・・・です。困ったときは、この予定ボードを見てくださいね。」

ある休日の朝、子ども部屋から元気な声が聞こえます。ドアの外側には「1年教室」と表示があります。どうやら小学生の息子たちが学校ごっこをしているようです。いつもは兄弟喧嘩が絶えませんが、その日は、国語（音読とひらがなれんしゅう）、算数（たして10になる数）、中間休み（外遊び）、生活科（アサガオの種植え）と学校と同じ時程で、半日を仲良く過ごしていました。学校ごっこが終わり、昼食を食べながら

「お兄ちゃん、教え方が上手じゃったけえ、勉強が全部楽しかったよ。ありがとう。」

「いつも先生にしてもらっとることをまねただけじゃあね。また、学校ごっこしようね。」と話していました。そして、私にこんなことを言いました。

「お父さん、教えるって楽しいね。新しい発見もあるし、自分の勉強にもなったよ。」

私は、兄には先生の背中、弟には兄の背中が大きく見えているのだろうと想像しながら、「お兄ちゃんは、本当の先生みたいだね。」と、二人の頭をなでてやりました。

そんな折、スポーツジャーナリストの二宮清純さんのご講演を聞く機会がありました。その中で、イタリアのサッカー教本に書かれている最後の一文を紹介されました。「il bello dorso」（イルベロドルソ）直訳すると「凜とした背中」だそうです。「〇〇は□□のどこを見ているか？それは顔ではない。背中なんだ。」と力強くお話しされました。講演の最後は、「良きリーダーたらんとする者は、まずもってみずからの地位にふさわしい背中を持ちなさい。」というローマ帝国の帝王学が一番初めに書かれている言葉でしめくられました。〇〇と□□の部分には、「子どもと親」、「弟妹と兄姉」、「児童・生徒と教師」、「選手と監督・コーチ」、「後輩と先輩」、「部下と上司」など、様々な対象があてはまります。そして、ここでいう「リーダー」には、様々な「立場」を入れ込んで考えても、意味合いは通じることと思います。「夫」、「父」、「教師」、「社会教育主事」、どの立場を入れ込んで私自身を省みても、汗顔の至りです。

背中とは、その人の人生、知性、理性、品性をあらわしているといわれます。しかし、自分で自分の背中を見ることはできません。それだけに、時には立ち止まって、自らの生きざまを見つめ直してみることは大切なことだと思います。そうすることで、周りの方々との関係性の中から、自分自身のありのままの背中が映し出され、それが自己理解につながるのではないのでしょうか。そして、自分の立場にふさわしい背中を持つための具体的な課題を見出すことができるのだと思います。

2011年女子サッカーワールドカップで優勝した“なでしこジャパン”のキャプテン澤穂希さんが、「苦しくなったら、私の背中をみなさい。」と後輩たちを引っ張り、チームを鼓舞したことは有名です。そう簡単に澤キャプテンのようにできませんが、まずは丸くなった背筋を伸ばし、姿勢だけでもよくして、自分自身を見つめることから始めてみようと思います。

カリキュラム・マネジメントすごろく

学校教育スタッフ 島田さつき

今年度の「新任教務主任研修」で、昨年度受講した奈良教育大学赤沢早人准教授の講義「カリキュラム・マネジメント」の伝達講習を行いました。

カリキュラム・マネジメントについて中教審答申では次のようにあります。

管理職のみならず全ての教職員が「カリキュラム・マネジメント」の必要性を理解し、日々の授業についても、教育課程全体の中での位置付けを意識しながら取り組む必要がある。また、学習指導要領等の趣旨や枠組みを生かしながら、各学校の地域の実情や子供たちの姿等と指導内容を見比べ、関連付けながら、効果的な年間指導計画等の在り方や、授業時間や週時程の在り方等について、校内研修等を通じて研究を重ねていくことも重要である。

出典) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について(答申)」(下線は赤沢准教授による。)

「全ての教職員が取り組む必要がある。」「校内研修を通じて研究を重ねることが重要。」ここだけ見ると、すべきことが増え、忙しくなるだけのように感じてしまいます。

しかし、カリキュラム・マネジメントは「先生方を元気づけるためのもの」であってほしいところです。この講義を受けるまで、そんな視点をもつことはありませんでした。この言葉は、カリキュラム・マネジメントが、各学校の教育目標を実現するために行うものという本質からきています。

各学校における教育課程は、当該学校の教育目標の実現を目指して、指導内容を選択し、組織し、それに必要な授業時数を定めて編成する。

出典)「小学校学習指導要領解説 総則編」

カリキュラム・マネジメントというと、どう教科横断的な年間指導計画を作るか、どう組織を構築するかといったシステム作りが必要であり、これまでも多くの提案がされてきています。ですが、忘れてならないのは、何のためにカリキュラム・マネジメントを行うかということです。「カリキュラム・マネジメントを通して各学校の教育目標を実現していく」という意識が大切です。

それを意識するために作成されたのが「カリキュラム・マネジメントすごろく」です。かわいらしい絵柄で楽しそうに見えますが、一人で一年間を見据えて作成してみるとかなり難しく感じます。ですが、学年部や生徒会、生徒指導部など複数のメンバーで、ひとつの目標に焦点を絞り、目指す姿に向かってできることはないかと話し合いながら作成するのは楽しいのではないかと思います。子どもたちの成長を期待して、新しいことを取り入れてみたり、気になっていた取り組みをやめてみたりするほうが、日々の前向きになれるのではないのでしょうか。そこが赤沢先生の言われる「先生方を元気づけるもの」なのだと思います。



こういったものも試してみたいはかがでしょうか。

「カリキュラム・マネジメントすごろく」は奈良教育大学 赤沢早人准教授のホームページよりダウンロードできます。

「とにかくどんどん使うこと」

益田市教育委員会 派遣指導主事 宮田 茂樹

今年の2月に、独立行政法人教職員支援機構で開催された「平成29年度学校教育の情報化指導者養成研修」に参加しました。この研修の中から、東京学芸大学准教授、高橋純先生の講義「わかりやすい授業づくりのための教科指導におけるICT活用」で印象に残ったことを紹介します。

【とことんズームアップする】

ICT活用の基本は「拡大提示」です。子どもたちは、拡大提示されることで細かい部分に気づくことができます。理科で使うルーペのようなものです。教科書や資料を拡大したり、やり方を教えるために手元を拡大したりと、そのやり方は教科や単元内容によって様々な可能性があります。

しかし、ただ映すだけではあまり効果がありません。そこで大事なのは何をどれくらい拡大提示するのかという「拡大率」です。提示された課題は、拡大すればするほど、情報は絞られていきます。「大きく映す」ということは、指導者のねらい（意図）が焦点化されることにつながります。例えば、教科書の資料一つとっても、全体を映すよりも、そこから最も学ばせたい部分をさらに拡大することで、子どもたちの気づきは変わります。何を大きく映すか、どこを大きく映すか、どこまで大きく映すか、それはなぜなのかを考え、とことんズームアップしてみることも教材研究の良い視点になるのではないのでしょうか。

【フラッシュ型教材で基礎基本】

学習において、基礎基本の重要性は言うまでもありません。しかし、限られた時間の中で、たくさんの時間を割く余裕は…。そこで、フラッシュ型教材の活用です。短い集中時間で、基礎的な知識力を高めるのに効果的です。漢字の読みや地図記号等の定番教材を使い、既習事項の確認・習熟のために使います。教材内、教材間で難易度を上げていき、答えさせ方のバリエーション（全員が基本）を変化させることでより集中して学習できます。長い時間するよりも、短い時間で毎回する方がさらに効果的です。紙でも作れますが、ICTを活用し、サーバーに蓄積することで、だれでもいつでも簡単に使え、書き換えることもできます。教科や単元ごとに手分けして作り、共有することもできます。使ってみたいけど、やっぱり作る時間は無いし、何だか難しそう…。大丈夫です。下記のリンクで様々なフラッシュ型教材がダウンロードできますので、ぜひ活用してみてください。

高橋先生は、「大切なのは、学びの質。あとは、とにかくどんどん使うこと。使っているうちに活用が進む。」と話されました。ICT活用は、あくまで一つの手立てであり、道具です。わかりやすい授業づくりのための教科指導におけるICT活用には、様々な使い方があります。「拡大提示」「フラッシュ型教材」だけをとっても、授業を活性化させるヒントがたくさん含まれています。まずは、次の授業に取り入れてみませんか。

※フラッシュ型教材が無料でダウンロードできます。<https://eteachers.jp/>

※高橋先生の講義は、独立行政法人教職員支援機構校内研修シリーズ（No. 37）で視聴することができます。

<http://www.nits.go.jp/materials/intramural/037.html>

自立活動について～新学習指導要領から～

特別支援教育支援専任教員

城市玲子

少し前のことになりますが、ある研修会で講師の方が「学習指導要領の総則に、特別な配慮を必要とする児童生徒への指導について述べられ、特別支援学級の指導や通級の指導においては自立活動を取り入れることと明記されたことはとても意義のあることだ」と話されました。そして、「自立活動についてすべての教職員が理解しておく必要がある」と言葉を添えられました。このことは各学校で重く受け止めなければならないことと思います。

自立活動の内容（6区分27項目）は、「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編」に詳しく示されています。

通級を受けている児童生徒や特別支援学級の児童生徒を前にして、どのような声掛けをしたら心の安定や意欲につながるのだろうか、迷われたことはありませんか。このような時、児童生徒が必要としている自立活動の内容や支援方法を校内職員で共有していることは大切なことです。

| 《自立活動の内容》 | |
|-----------|-----------|
| 1 | 健康の保持 |
| 2 | 心理的な安定 |
| 3 | 人間関係の形成 |
| 4 | 環境の把握 |
| 5 | 身体の動き |
| 6 | コミュニケーション |

また、小中学校学習指導要領解説 総則編（通級による指導における特別の教育課程）には、「通常の学級の担任と通級の担当教師とが随時、学習の進捗状況等について情報交換を行うとともに、通級による指導の効果が、通常の学級においても波及することを目指していくことが重要である」と述べられています。通常の学級の担任は通級による指導の目標や指導の様子を把握する必要がありますし、通級の担当者は通常の学級での状況を含めて実態把握が必要です。互いに連携の取れた関係者として、しかも自立活動の視点を持ってケース会議を持つことができれば、育てたい方向性や手立てが一層明確になるのではないかと思います。

小中学校にあっては、特別支援学級の設置の有無や通級指導を受けている児童生徒がいる・いないに関わらず、自立活動についての校内研修をお願いしたいところです。今回の学習指導要領解説【第4章 指導計画の作成と内容の取扱い（教科・領域によっては第4章以外）】には、「見えにくさ、聞こえにくさ、道具の操作の困難さ、移動上の制約、健康面や安全面での制約、発音のしにくさ、心理的な不安定、人間関係形成の困難さ、読み書きや計算の困難さ、注意の集中を持続することが苦手であることなど、（中略）個々の児童生徒の困難さに応じた指導内容や指導方法」について示されています。これらの困難さへの対応はまさに自立活動に関連あることであり、その支援方法は多くの児童生徒に対してもとても有効な手立てになると言えます。そうして効果的な支援がなされれば、児童生徒はより安心して授業や活動に参加できることと思います。

